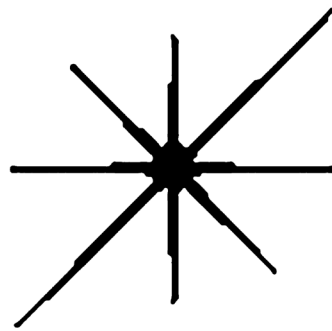


コメット通信 15

[’21年10月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 第二次世界大戦下のブランシヨ】

第二次大戦期のフランスで執筆すること
安原伸一朗——3

批評家になること，あるいは，消滅の始まり
郷原佳以——5

沈黙から沈黙へ
門間広明——8

はじまりのブランシヨ
石川学——11

ブランシヨと歴史
——1943年のいくつかの時評について
伊藤亮太——13

1942年のブランシヨ
——第一次世界大戦の痕跡に向かって
高山花子——15

【連載】

やつぱりこれをやつてよかつた
——Books in Progress 13
小泉直哉——18

妖怪から民主主義へ
——裸足で散歩 15
西澤栄美子——20

【特集 第二次世界大戦下のブランショ】

第二次大戦期のフランスで執筆するということ

安原伸一朗

1941年4月、ブランショは『ジュルナル・デ・デバ』紙の「知的生活時評」と題された文芸欄を、「おのれを揺り動かす感情を表現できずに、傷を受けた人々は、読書のうちに身を投げ出す」⁽¹⁾と書き始めているが、彼がこのような穏やかならぬ文章を発表したのは、いったいどのような時代だったのか。

第二次大戦期のフランスと一口に言っても、無論のこと、1939年9月にドイツに宣戦布告した第三共和政のフランスと、「奇妙な戦争」を経てナチスと休戦した1940年8月以降のヴィシーのフランスとは大きく異なっている。たとえばジャン・ジロドゥは、開戦時には情報局総裁として総動員をラジオで国民に語りかけていたが、フランスの敗北に及んで総裁職を辞しながらも、占領下で二つの戯曲を発表し、ドイツ側の検閲官ゲルハルト・ヘラーをして「[[ジロドゥは]ドイツ人の徳とフランス人の徳がどれほど相互補完的であるかを示した」⁽²⁾と言わしめている。

また、ペタンを国家元首とするヴィシー政府はたしかに対独協力政策を進めたものの、占領下のパリとフランス国のヴィシーとは様相を異にしていた。第二次大戦期のベストセラーと言えば、1942年刊のリュシアン・ルバテによる『残骸』だが、これは、「フランス政府はヴィシーでくたばるか、さもなく生きる意欲を発見し、そしてすでに希望を選択した人々と都で合流するかだ」⁽³⁾などと断っているように、パリでナチスを礼賛した著者による、第三共和政のみならずヴィシーのフランスにも向けられた激しい呪詛の書だった。これに対してヴィシーでは、30年代までは王党派ナショナリズムの立場からドイツを敵視し続けていたシャルル・モーラスが、リヨンに移った『アクション・フランセーズ』紙にて「ただフランスのみ」を合言葉にペタンを全面的に支える論陣を張っていたのである。

それゆえ、第二次大戦期のフランスでは、ナショナリストが何を意味するかも明確ではないし、平和主義者であるがゆえにつねにどっちつかずの態度をとり続けたジャン・ジオノのような作家の名が、パリ解放後にレジスタンスの全国作家委員会が対独協力作家を一覧にした「望ましからぬ作家のリスト」に見出されるように、誰が対独協力者だったのかさえ実のところ判然としない場合もあった。対独協力者に対する肅清裁判の嵐が吹き荒れる最中の46年にジャン・ポーランがしみじみも述べることになるが、まさに「愛国心とは謎である」⁽⁴⁾。

そして、戦時下の作家や出版者が避けて通れない問題が、検閲だった。休戦後、ドイツの占領当局とフランスの出版組合とが検閲協定を結び、占領当局からの用紙の配給と引き換えにフランス側が自主的に規制するという体裁を取って、1940年秋には禁書目録「オットー・リスト」が発表される。これによって、反ドイツ的書物とユダヤ人の著作がフランスおよびドイツにとって有害な書籍として禁書とされた。そして同じ1940年秋にはヴィシー政府が、占領地区のドイツ当局にならってユダヤ人身分法を制定し、ユダヤ人を公職や多くの文化産業から締め出している。

そのような時代において、30年代に第三共和政を激しく論難していた〈青年右派〉はその多くが、フランスの敗北を嘆くナショナリストとしての立場よりも、敗北による第三共和政の崩壊を寿ぐ反民主主義の姿勢を貫くわけだが、ブランショも例外ではなかった。とはいえ、ロベール・ブラジヤックは虜囚生活から解放された後にパリでナチズムに傾倒していき、ティエリー・モーニエはモーラスに

付き従ってヴィシーの「国民革命」を支えていくなかで、ブランショの立場はあまり明瞭なものには見えない。彼は1940年、一本の文芸時評に加えて、第三共和政の瓦解を喜ぶ三本の文章を発表しているのだが、その後1941年には、30年代を通じて執筆していた『謎の男トマ』を刊行し、同年4月から1944年夏にかけては、クレルモン＝フェランで再刊されていた『ジュルナル・デ・デバ』紙に文学時評を毎週のように発表していくことになる。そしてその傍らで、ヴィシー政府の助成を受けた文化組織〈若きフランス〉に1941年初頭から「参加」してもいた。ただし参加とは言うものの、組織内の路線対立などから実質的にはサボタージュに近いものであって、それは言うなれば「ヴィシーを利用してヴィシーに反逆すること」⁽⁵⁾を目指すかのような振る舞いだった。

30年代にあれほど筆鋒鋭い政治時評を多く発表していた姿とはきわめて対照的に、ヴィシー政府から援助されていた第二次大戦下の『ジュルナル・デ・デバ』紙において、モーラスを参照しながらサント＝ブーヴの政治論にかんする書物を評した文章などのわずかな例外を除いて、ひたすら文学を論じるブランショの挙措は、〈若きフランス〉で頓挫した「ヴィシーを利用してヴィシーに反逆する」試みを完遂しようとするものだったのかもしれない。

【注】

- (1) モーリス・ブランショ『[文学時評 1941-1944](#)』郷原佳以ほか訳、水声社、2021年、15頁。
- (2) ゲルハルト・ヘラー『[占領下のパリ文化人](#)』大久保敏彦訳、白水社、1983年、174頁。
- (3) リュシアン・ルバテ『[残骸](#)』池部雅英訳、国書刊行会、2002年、461頁。
- (4) Jean Paulhan, « Slogans des jours sombres », *Œuvres complètes*, tome V, Gallimard, 2018, p. 296.
- (5) クリストフ・ビダン『[モーリス・ブランショ——不可視のパートナー](#)』上田和彦ほか訳、水声社、2014年、146-152頁。

執筆者について——

安原伸一朗（やすはらしんいちろう） 1972年生まれ。現在、日本大学商学部准教授。専攻＝フランス文学。小社刊行の主な訳書には、クリストフ・ビダン『[モーリス・ブランショ——不可視のパートナー](#)』（共訳、2014年）、『[モーリス・ブランショ 政治的パッション](#)』（水声社、2020年）などがある。

【特集 第二次世界大戦下のブランシヨ】

批評家になること、あるいは、消滅の始まり

郷原佳以

「私が変わったことは疑いようがありません。」
(ブランシヨ, モーリス・ナドール宛書簡, 1977年4月21日)

フランス占領期における『ジュルナル・デ・デバ』紙へのブランシヨの連載をまとめた『文学時評 1941-1944』の翻訳が完成するとすぐに、以前から作業について伝えていた原著編者のクリストフ・ビダンと英訳者のマイケル・ホランドに報告した。どちらもブランシヨ研究の第一人者である。その際、「本書はブランシヨの本としてはマージナルですが、主要著作はすでに翻訳されているので、日本の読者が本書によってブランシヨの別の姿を発見してくれることを願っています」といったことを書き添えたところ、ホランドから、こちらの趣旨は汲みとったうえでだが、「本書はマージナルだとはまったく思いません」との返信が届いた。ホランドは本書を翻訳しながら、「ブランシヨの思考の深化にとってのこの時期の仕事の重要性」に気づいたという。そして、「戦争による裂け目によって、また、1941-1942年以後数年のあいだ小説家としての仕事が止まったことによって、ブランシヨは自らの思考に甚大な方向転換を強いることになったのであり、私たちはその痕跡を一篇一篇辿ることができるのです」と言う。「小説家としての仕事が止まった」とは、1942年に『アミナダブ』を上梓してから1948年に『至高者』および『死の宣告』を上梓するまでブランシヨが小説作品を発表していないことを指す。付言すれば、『至高者』は、疫病に見舞われた都市で監視や密告が蔓延する様を描いており、『死の宣告』は、執筆を生業とするらしき語り手が、1938年のミュンヘン会談前から戦中にかけての不穏でありながらどこか深刻さに欠ける——サルトルの言う「奇妙な戦争」——パリでの一連の奇妙な出来事を語る物語であり、執筆はそれぞれ1946-47年、1947-48年と考えられている。同じ1947-48年には、1941年に刊行された長篇小説『謎のひとマ』の大幅な改変も行われている。まるで著者は、戦後になって新たに複数の文芸誌に関わり文芸批評家としての活動を一挙に開放しながら、同時に虚構作品において強迫観念のように戦前・戦中期に立ち返り続けるかのようである。50年後にはさらに、1944年6月にカンで家族とともにドイツ軍に銃殺されかかった経験をもとに短篇『私の死の瞬間』を発表するだろう。「そのたびに死に回帰し、死をふたたび中心化し、死に正面から向き合うということ」⁽¹⁾とビダンは述べている。

以上のことに鑑みても、『ジュルナル・デ・デバ』の文芸時評は、ホランドの言うとおりに、占領下における思考とエクリチュール⁽²⁾の方向転換の軌跡として読むことができる。ブランシヨにおける「転向」そのものは、戦争前夜ないし開始直後に位置づけられるのが通例である。ナンシーははっきりと「1940年のブランシヨの急変」⁽²⁾と述べている。確かに、1930年代に『ジュルナル・デ・デバ』『コンバ』『アンシュルジュ』『ランパール』といった右派の紙誌に国粹主義的な政治時評を発表していた〈青年右派〉の論客は、1937年の政治時評を最後に文芸時評に軸足を移し、1941年、親ベタンの路線を打ち出す『ジュルナル・デ・デバ』紙で再び連載をもつにあたっては、かつてとは打って変わって「知的生活時評」という何とも「優雅な」⁽³⁾表題のもとに、近刊の文芸・人文書の批評に徹するようになった。そうして書かれた原稿は、そこからポーラン論『文学はいかにして可能か』(1941)、評論集『踏みはずし』(1943)、および日本語版で500頁を超える『文学時評』が生まれるほどの膨大な分量になっ

たのだが、しかしそれらは、戦前の政治時評や戦後の文芸批評に比して、容易にはその「色」が見定めがたい文章群である。見定めがたいのは、ひとつには、それらが占領当局による出版検閲下で発表されていて、本音が隠蔽されている可能性があるからである。しかし、内田樹のように、そこに政治的見解が隠れていることを確信し、『文学はいかにして可能か』を「文芸上の概念の検討を偽装した政治的論説」⁽⁴⁾として暗号解読する読解も、それが文学論としての読解を完全に捨象している限りで、強引さを免れていないように思われる。かといって、ビダンや安原伸一郎らが的確に指摘しているように、書評対象の選択や論じ方に政治性が皆無というわけでもない。とはいえ、やはり指摘されるとおり、その書目には対独協力作家のものもあれば反ナチス作家のものもあり、禁書リストに挑戦するようであれば、特定の政治性を窺わせないようでもある。ただし、『私の死の瞬間』に「マキの同志たち」⁽⁵⁾が出て来るところからすれば、シャルのような闘士ではなかったにせよ、ブランショがポーランドを通じてレジスタンスに関わっていたことは想定される。実際、1977年のモーリス・ナドロー宛て書簡でブランショは、「ブラジャックが編集長を務める [……] 『ジュ・スイ・パルトゥ』誌にゲシュタポへ密告され、致命的なことになりそうでした」⁽⁶⁾と述べている。かくして、占領下におけるブランショの政治的態度を、書かれたものから一言で言い当てることは、少なくとも私にはできない。

その代わり、『ジュルナル・デ・デバ』紙の文芸時評、とりわけその1944年のパリ解放までの8か月分の翻訳を担当した者として感じ取ったことを率直に述べれば、まずもって、ブランショはこれらの「文芸時評」が単行本にまとめられることをいささかも望んでいなかったであろうということである。近刊を対象にした「文芸時評」の不安定さ、はかなさこそを彼は望んでいたからである。そもそも『踏みはずし』の企画からして、1943年初めにマスコロを通してガリマールのその希望を聞いたブランショにとって、寝耳に水だった。いったいいかなる野心的な批評家が、おのれの第一評論集に、「脱線」と迷った末に「踏みはずし」などという表題を付ける⁽⁷⁾だろうか。批評家としての野心といったものは、少なくともこの時期のブランショには欠けていた。それでいながら、というより、それゆえにこそ、彼はこの時期、毎週淡々と近刊書評を書きながら、「批評とは何か」、「批評家とは誰か」と自問し続けたのである。そしてそのヒントは、この4年間を通して育まれ続けた2人の人物との対話から与えられた。すなわち、ポーランドとバタイユである。

『ジュルナル・デ・デバ』の文芸時評は、ポーランドとバタイユとの対話の軌跡として読むことができる。1940年末の出会い以来、ブランショは定期的にバタイユの会合に出席し、出版前の『内的経験』の朗読を聞いて意見を述べもした。『タルブの花』のみならず、ブランショはポーランドの評論を追い続け、そこから文学言語について、批評について学び続けた。1944年1月の文芸時評「批評の神秘」はその帰結である。唯一の批評家としてフェリックス・フェネオンを論ずるポーランドの論文を参照しながら、ブランショは、「批評が実在するという事は確かでない」と述べ、批評家の本性は「不可視となり、姿を隠し、存在しなくなる事」だと述べる。続けて文学の営みを「言語の供犠」に見出すとき、彼が参照しているのは『内的経験』である⁽⁸⁾。この「批評の神秘」(1944)に続くように、ブランショは戦後、「批評の謎」(1946)、「批評の条件」(1950)、「批評の現況は？」(1959)において批評について論ずることになるが、いずれにおいても、批評の言葉はその固有性の欠如と消滅において捉えられている。

内田樹がポーランド論に『コンバ』誌周辺の複数の政治的党派への批判を読み取り、ジェフリー・メルマンが40年代ブランショにおける「消滅」の語彙に30年代の政治的姿勢の抹消の身振りを見て取ることを、否定しようとはまでは思わない。けれども、そうであったとしても、それと同時に、あるいはそれ以上に、ブランショはポーランドやバタイユから、本当に、批評について、つまりエクリチャー

ルについて学んだのであり、その軌跡が『ジュルナル・デ・デバ』紙の文芸時評なのだ、私は考えている。

【注】

- (1) クリストフ・ビダン『モーリス・ブランショ——不可視のパートナー』上田和彦他訳、水声社、2014年、198-199頁。
- (2) ジャン＝リュック・ナンシー『モーリス・ブランショ 政治的パッション』安原伸一郎訳、水声社、2020年、12頁。1930年代および第二次世界大戦中のブランショの政治姿勢については、この本の安原によるきわめて詳細な訳注および訳者あとがきを参照のこと。
- (3) ビダン、前掲書、162頁。ナンシー、前掲書、安原による訳注、123-124頁。
- (4) 内田樹「面従腹背のテロリズム」、『言語と文学』書肆心水、2004年、377頁。
- (5) ブランショ『私の死の瞬間』、『滞留』湯浅博雄他訳、未来社、2005年、9頁。
- (6) *Quinzaine Littéraire*, n° 741, le 16-06-1998.
- (7) ビダン、前掲書、194頁。
- (8) ブランショ『文学時評 1941-1944』郷原他訳、水声社、2021年、412頁。

執筆者について——

郷原佳以（ごうはらかい） 1975年生まれ。現在、東京大学准教授。専攻＝フランス文学。小社刊行の主な著書には、『[洞窟の経験——ラスコー壁画と人間の起源をめぐって](#)』（共著、2021年）、主な訳書には、クリストフ・ビダン『モーリス・ブランショ——不可視のパートナー』（共訳、2014年）、ブリュノ・クレマン『[垂直の声——プロソポペイア試論](#)』（2016年）、モーリス・ブランショ『文学時評 1941-1944』（共訳、2021年）などがある。

【特集 第二次世界大戦下のブランショ】

沈黙から沈黙へ

門間広明

ブランショは、ロジェ・ラポルト宛の書簡において、「昼のエクリチュール」と「夜のエクリチュール」という区別を立てて、1930年代から大戦中にかけての、政治ジャーナリズムの世界で働きながら作品を書いていた頃の自身の生活を振り返っている。「昼のエクリチュール」とは、政治ジャーナリストとしての「しかじかの役に立つ」文筆活動のことである。他方、役所勤めの傍ら夜に執筆していたカフカに自身を重ねつつ語られる「夜のエクリチュール」とは、「私のアイデンティティを変化させたり、あるいは捉えがたく不安を催させる未知なるものの方へと私のアイデンティティを導いたりすることで、私をエクリチュール以外の要請とはいっさい無縁のものとする」、主体にとって危険な文学的エクリチュールのことである（ジャン＝リュック・ナンシー『モーリス・ブランショ 政治的パッション』安原伸一朗訳、水声社）。

ブランショは「夜のエクリチュール」という言葉で、当時執筆していた『謎の男トマ』や「牧歌」「最後の言葉」といった自身の文学作品のことをもっぱら考えていたのだろうか。それとも1937年に執筆の機会がとみに増えた、他の文学者の作品を取り上げた新聞掲載書評——分量的にはごく短いものにすぎない——も、「夜のエクリチュール」なのだろうか。もちろんこの問いにはっきりした答えはないのだが、少なくとも、『文学空間』に代表される後年のブランショの批評が「夜のエクリチュール」と呼ばれるにふさわしいものであることに異論はないだろう。それはたんに、この書物が文学の領分を夜——より正確には、昼と夜の相補性そのものを逸脱する「もうひとつの夜」——と同一視する理論を提示しているからではない。そうではなく、そこでは批評という営みそのものが、そこで論じられているいくつかの本質的な文学作品に比すべき深み——夜の深み——に達しているからである、と言ってみたい。とはいえ、ブランショが批評活動に乗り出してからこの境地に至るまでにはそれなりに長い時間が必要であったこと、「夜のエクリチュール」としての批評が少しずつ生成していったものであることも、また自明であろう。

そうであれば、このたび翻訳の成った『文学時評 1941-1944』に収められた書評群は、「昼のエクリチュール」から「夜のエクリチュール」への移行期にあたると見ることができる。一方で、ブランショは数年来すでに政治記事の執筆から遠ざかっていたとはいえ、これらの書評は親独のヴィシー政府を公然と支持した政治紙『ジュルナル・デ・デバ』に連載されたものであり、そこではモンテルラン、シャルドンヌ、ドリユといった対独協力作家や、反ユダヤ主義的な主張で知られるジュアンドーらの作品が高く評価されている。また後年の批評からは跡形もなく消え去る、フランスという国家の特異性を前提とした文明論的な記述も目につく。とはいえ他方で、これらの時評は、掲載紙が掲げる政治的主張とは頑なに——と思えてならないのだが——距離を置きながら書き継がれており、安原伸一朗が言うように、明らかに紙面から「浮いたもの」に見える（前掲訳書、訳注）。何よりそこには、文学作品における〈私〉という人称や言語の内容と形式の関係をめぐる考察、あるいは連載開始の少し前に出会っていたバタイユの影響を明白に感じさせる「非-知」や「供犠」についての記述など、後年の批評へとつながっていく要素が多数見いだせるのである。

しかしここでは、本訳書冒頭の二篇、すなわち連載の初回および第二回のささやかな細部に眼を

凝らしてみよう。郷原佳以による「訳者あとがき」でも指摘されていることだが、これらの記事には、爾後は影をひそめる時局への言及が読まれる。具体的には、ブランショは「作家たちの沈黙」について語っている。これはごく普通の意味では、ナチ占領下のフランスにおいて、検閲などの政治的弾圧により作家たちが自由に言葉を発し流通させることができなくなっていた事態を指す。ところがブランショは、連載初回の末尾につきのように書く。

事実なのは、多くの作家たちが沈黙を強いられたが、それは彼らが遭遇しえた外的な困難によるというよりもむしろ、不毛さの真の試練のゆえだということである。[……] 乾き果てた夜の帳が、彼らのうえに落ちた。空しく動き回る数々の年月を経て、彼らはずいに、おのれ自身の沈黙を耳にしたのだ。

そして、以上をうけて「作家たちの沈黙」と題された第二回では、目下出版され読まれている書物の背後に「書かれなかった書物、普段なら書かれるはずだった書物のすべてが作りなす驚くべき総量」、 「不在の書物、消滅させられた書物のこの巨大な図書館」が透かし見られ、さらにはそれにことよせて、「作者の観念が破局のなかに消滅し、その他の数多くの名残とともに、はるか遠くへ運び去られてしまったかのような感じ」が語られる。ブランショは、占領下という時代状況が作家たちに強いている沈黙、すなわち表現・出版活動の不自由に、具体的に体験された災難を超えた本質的な不毛さ、「乾き果てた夜の帳」を読みとり、その背後に、書かれなかった不在の書物を集積する巨大な図書館を幻視するばかりか、それを作者の観念の消滅へと結びつける。ここには明らかに大胆な飛躍がある。しかし、この飛躍こそが後のブランショの批評を準備したものではないだろうか。実際、「沈黙」や「不毛さ」は後のブランショが展開する文学論のキーワードになるだろう。しかしその源流には、それよりずっと具体的な意味の、否応なく時代の情勢に結びついた「作家たちの沈黙」があったかもしれないのだ。

ところで、占領期のフランスを扱った書物への序文において、ジェローム・プリユールはこう述べている。「徹底した言語批判であり、文学という事象そして物語の可能性そのものについての問いかけであるかの『タルブの花』[ポーラン]がこの時期に出たのは偶然だろうか。1941年に『タルブの花』と『孤絶』[ファルグ]と『盲人の仕事』[アンリ・トマ]が、1942年に『物の味方』[ボンジュ]と『異邦人』[カミュ]が、1943年に『見えない証人』[タルデュー]が出たのは偶然だろうか。これらの書物の題は何かの徴候のように響く」(Archives de la vie littéraire sous l'occupation : A travers le désastre, Tallandier, 2009)。プリユールはこの直前にブランショを引いているので偶然ではないだろうが、ここに挙げられた書物はすべて、ブランショが『ジュルナル・デ・デバ』の時評で言及しているものである(本訳書ではなく評論集『踏みはずし』に収録されたものも含む)。文学と、それを成り立たせている言語についての透徹した洞察を含む書物が、表現・出版活動が大きな困難に陥っていた時代に陸続と発表されたのであり、ブランショはそうした書物を読み、それらについて書きながら、少しずつ自身の批評を鍛え上げていった。もう少し「哲学寄り」の書物として、バランの『言語の本性と機能についての探求』(1942)、そしてバタイユの『内的体験』(1943)もここに加えてみたい。これらの書物は、上で触れた「沈黙」という主題に関しても、ブランショが思索を深める重要な契機になったと思しい。

もう少し視野を広げてみれば、1940年代のフランスでは、ブランショをそのアクターの一人とするある特異な言語思想、思いきって単純化すれば文学言語のあり方から言語そのものの本質に迫ろう

とする言語思想が花開いたと言ってよく、そのキーワードのひとつは間違いなく「沈黙」だった。そして、こうした潮流の端緒を開いた、上に挙げたような著作群が発表されたのは、確かに大戦中に集中しているように思われるのである。これは偶然だろうか。あるいは筆者の視野の狭さゆえの錯覚にすぎないのだろうか。それともほんとうに、占領期のフランスという特異な時空がこうした思考の誕生を促した——あるいは強いた——ということがあるのだろうか。この最後の可能性について、もう少し考えてみたい気がする。

執筆者について——

門間広明（もんまひろあき） 1976年生まれ。現在、北海学園大学准教授。専攻＝フランス文学。小社刊行の論文には、「焼け残るものへの眼差し——1940年代のブランシヨはバタイユをいかに読んだか」（『別冊水声通信 バタイユとその友たち』2014年）、主な訳書には、モーリス・ブランシヨ『文学時評 1941-1944』（共訳、2021年）などがある。

【特集 第二次世界大戦下のブランシヨ】

はじまりのブランシヨ

石川学

今回、ブランシヨ『文学時評 1941-1944』のうち、1941年分の翻訳を担当した。私の専門はジョルジュ・バタイユであり、訳者のなかで唯一の門外漢である。そのような身で、本の出だし部分の訳出を受け持ったのは、今思うとずいぶん身の程知らずなことであった。とはいえ、ブランシヨとバタイユの出会いの時期(1940年末)にほど近いこの時期の時評に取り組む機会を得られたことは、私にとって、きわめて貴重だった。

「訳者あとがき」に記されているように、「本書には戦時下の状況への言及がほとんど現れない」。もちろん、「時局と結びついた作品が取り上げられないわけではない」が、ブランシヨの関心はけっして時局への気がかりに回収されてしまわない。「フランスと現代文明」、また、「文化と文明」という、ヴァレリーを大きな拠り所にしたフランス文明論に顕著なように、ブランシヨの視座は、第二次世界大戦という圧倒的に生々しい、しかし限定的な同時代性には縛られない、歴史的なスパンで物事を捉える意志に貫かれている。作家の仕事に期待されるのもまた、そうしたある種の反時代性、あるいは超時代性を、作品に結実させることである。作家を「自らの本性から、その無関心から、その他全部と驚くほど異質な彼の自我から逸脱させる可能性のあるすべてのもの、社会奉仕だの国民的奉仕だの、献身の欲求だの思いやりの行為だの、何であれ、何らかの口実のもとで彼を内奥の近寄れぬ孤島の外に連れ出し、現状への何らかの気がかりやら読者についての何らかの思索やらをもたらすすべてのもの」に対してブランシヨが向ける嫌悪は、相当なものだ(「作家と読者」)。ブランシヨにとって、時局のなかで作家のなしうる貢献とは、おのれの孤独な内奥を頑として保ちつつ、時代の足枷から外れた作品を生み出すことなのである。それは、凡庸な他者たちに背を向け、作家の個の卓越性に立てこもることを意味しない。時局から逃れるべくもないのは、作家も読者も同等である。「地中海の人間」の仕事に仮託して言われるように、作家の仕事とは、「自分という偶然的で不安定で断片的な個を、自らが含み持つ普遍的自我に置き換え、おのれに普遍性をもたらし、そうして自らを宇宙の力へと高め、単一者たちの複数性に裁きを下し、偶然性を逃れること」なのだ(「地中海の靈感」)。望まれているのは、時代性の限定を受けた個を否定し、普遍へと移行することである。「死に耐え、死のうちに自らを保つ生」、「おのれを絶対的引き裂きのうちに見出すこと」というヘーゲル『精神現象学』の言葉が想起される。周囲から内奥の孤絶を守りつつ、なおもおのれの個別性を自ら抹消しなければならないのだとすれば、作家が耐え忍ぶ孤独とはいかほどのものであろう。

だが、この孤独は作家だけのものではない。語義に反して、それは伝達されるのであり、この伝達においてはじめて、日常のつながりという重しを離れた共同の地平が、「普遍」が垣間見られるのである。ブランシヨは演劇を主題にこのように言う。「演劇作品は、あらゆる芸術作品と同様に、孤独から生まれるのであり、その定めは、作品を理解する人間を、自らが意識している共同体のまさに只中で、沈黙と孤独のうちに打ち捨てることである。演劇作品は、一人きりの人間からやってきて、ただ一人の人間へと帰っていく」(「演劇と観客」)。現実世界において実体を取らない、孤立者たちの密かな共同を語るこうした言葉は、43年もの後、バタイユに関して発せられることになる以下の言葉と通じていく。「ジョルジュ・バタイユは、10年以上ものあいだ、思考においても現実においても、

共同体の要請を実現するべく試みたのちに、またしても孤独へ立ち戻ったわけではなく（いずれにせよ孤独ではあるのだが、分け持たれた孤独のなかである）、不在の共同体に、いつでも共同体の不在へと変化しうる、そうした共同体に身をさらしたのである」（『明かしえぬ共同体』、1983年）。顧みられているのは、『ドキュマン』（1929-31年）から「ソクラテス研究会」（1941-43年）までの「共同体の試み」を経たパタイユであり、ブランシヨはその最後の局面に立ち会うところから友愛の歩みを重ね、つまりは孤独を分け持つことになる。二人のあいだに作品があるかのように、あるいは、二人のあいだが作品であるかのように。

第二次世界大戦下のブランシヨ、『文学時評 1941-1944』のブランシヨ、「〈ブランシヨ〉以前のブランシヨ」（「訳者あとがき」）は、パタイユとのはじまりのブランシヨでもある。そのはじまりを、〈ブランシヨ〉のはじまりと結びつけて読むことができるだろうか。今回の訳業を契機として、担うべき検討課題だと感じている。

執筆者について――

石川学（いしかわまなぶ） 1981年生まれ。現在、慶應義塾大学商学部准教授。専攻＝フランス文学・思想。小社刊行の主な訳書には、ドゥニ・オリエ『[ジョルジュ・パタイユの反建築](#)』（共訳、2015年）、モーリス・ブランシヨ『文学時評 1941-1944』（共訳、2021年）などがある。

【特集 第二次世界大戦下のブランショ】

ブランショと歴史

—1943年のいくつかの時評について

伊藤亮太

第二次大戦下のブランショによる時評の特徴の一つとして、歴史学ないし歴史を主題とした書物への言及の多さが挙げられるが、それはとりわけ1943年の後半あたりに集中している。6月23日刊行の紙面に掲載された、クロード・ロワの『フランス組曲』を取り上げた時評（「フランス組曲」）が最も早いもので、そのあと『ロランの歌とフランスの歴史』（『ロランの歌』について）、『16世紀における不信仰の問題——ラブレーの宗教』（「ラブレーの宗教」）、『フランス文学の歴史』（「フランス文学の歴史」）、『歴史と運命』『傑作——人文主義への招待』（「歴史と傑作」）、『聖ヨハネの黙示録——歴史に関するキリスト教的展望』（『黙示録』についての一研究）、とこの時期に繰り返し歴史関連の書物を時評の対象としている。

ブランショにこうした時評対象の選択を促したものとして一つ推測できるのは、対独レジスタンスの動向だろう。この年の5月27日に全国抵抗評議会が、次いで6月3日にアルジェでフランス国民解放委員会が結成され、国内外のレジスタンス組織が統一された。クリストフ・ビダンによる評伝には「ブランショは、ジャーナリストを職業としており、つねにあらゆる情報に通じていたため、レジスタンスとも密かに連絡をとっていた」（『モーリス・ブランショ——不可視のパートナー』145頁）とあり、ブランショがこうした出来事をさほど遅れることなく知るに至った可能性は低くない。取り戻されるべき真のフランスの統一性を仮定し、またそれを代表しようとする意志のごときものを、彼はそこに嗅ぎ取っていたのではないだろうか。

実際「フランス組曲」において問われるのは、すべての言葉、さらには沈黙さえも「フランス」についての語りへと結集させようとするような言説空間である。ブランショは、歴史を通して現在を説明し、未来の希望を引き出そうともする、フランスについて書く作家たちに対してこう書いている。「一つの国民について与えられうるすべての定義は歴史的である。[……]それは過去の真理をまったく恣意的な仕方ですべて新たな領域にまで敷衍するのだが、そこは真理もともその時代が衰滅するに至る領域なのである」。そしてフランスについての語りから聞き取れることは、「これこそがこの国民が存在したということであり、もはや決して存在することはないだろう、ということ」だと言う。つまりブランショは、第二次世界大戦下の状況に、少なくとも1943年の時点に、一つの国民ないし国家の、一つの歴史といったものが不可能になるような断絶を見て取ろうとしているのだ。マイケル・ホルランドによれば、1930年代のブランショも「歴史の断絶」をフランスのうちに捉えていたが、それは「来るべき国家」を可能にする「時間の外」として表れていた。しかし「フランス組曲」を書く時点においては、「時間の外はいまや、歴史から逸脱する現在の深淵なのである」（« Blanchot et la sortie du nihilisme » in *Avant dire: essais sur Blanchot*, Hermann, 2015, p. 228）。

こうしてブランショはこの後も、歴史をめぐる書物を評しながら、歴史を困難にするもの、歴史に組み入れられるがままにはならないものを見出そうとしていく。「ラブレーの宗教」において、それは「先駆者」である。ブランショによればリュシアン・フェーヴルはその著書において、ラブレーを現代風の解釈から救い出し、ラブレー自身の時代へ置き戻すことに成功したのだが、そのことであってラブレーの「先駆者」としてのあり方が明確になる。ブランショはこう書いている。「先駆者

は、未来の時代から識別されるためには自分の時代に結び付きすぎているが、その計画が自分の時代に先行し、そこでは理解されがたいゆえに、その時代に影響を与えることもできないが、それでも一種の有用性を持っている。それは、歴史に対し、なされたことだけでなく、むなしく夢見られたことも、自らに背いて扱うように強いということである。

「歴史と傑作」においては、ガストン・ループネルの著書について、最終的には歴史を目的論に還元してしまったことを嘆きつつも、「劇的な諸契機」ではなく「日常生活」や「何も起こらない」「空白の持続」に着目したことを好意的に評価しているように読める。「その空白の持続は、その上に物語の骨組みが定められる例外的な瞬間と同じように、歴史家にとって重要性を持っている。すべての時代は同じ価値を持ち、責任と運命の同じ重さを持っている。そして私たちは人間の企ての真の始まりも終わりも知らないのである」、と書き、歴史研究のうちに、歴史の起源と終わり＝目的の把握不可能性を見出している。

一部の時評しか取り上げることができなかったが、以上のことからブランショの歴史に関する後年の思想の萌芽を読み取ることもできるだろう。そして、後年の思想がヘーゲルやハイデガーを経由した非常に抽象的なものに見えるとしても、それは確かに雑多な複数の根を持っているのである。

執筆者について――

伊藤亮太(いとうりょうた) 1985年生まれ。早稲田大学文学研究科博士課程満期退学。専攻＝フランス文学。主な論文には、「モーリス・ブランショにおける『人間』の問題」(『日本フランス語フランス文学会 関東支部論集』第28号)、小社刊行の訳書には、モーリス・ブランショ『文学時評 1941-1944』(共訳、2021年)などがある。

【特集 第二次世界大戦下のブランシヨ】

1942年のブランシヨ

——第一次世界大戦の痕跡に向かって

高山花子

『文学時評』の共訳のための最初の打ち合わせは、2016年5月8日、日曜日、渋谷のカフェミヤマで行われた。ほとんどなりゆきで、わたしの担当は1942年1月から11月に連載された23本の記事になった。訳出作業をはじめると、すぐに一筋縄ではいかないことがわかる。『ジュルナル・デ・デバ』に連載されていたブランシヨの「知的生活時評」は、実質、新刊を取り上げた書評だったのだが、肝心の書評対象本の多くが、いまとなっては絶版になっていたり、入手が困難だったり、邦訳などないものが大半だったのである。最初、懸念していたのは、自分の担当する1942年の最初のテキストが、1930年代とそれ以後の政治的なブランシヨをめぐるはずとあってよいほど言及されるドリュ・ラ・ロシエル論だったことである。さらに、1942年3月10日に掲載されたのは、マキシム・ルロワの著作をめぐる書かれた「サント＝ブーヴの政治」と題された、1830年の革命や、クーデタ、社会変革や再編に目配せをしているテキストだったので、このあたりについて、慎重な調べが必要になる箇所が出てくるのではないかと心配していた。しかし、振り返ると、すくなくともこの時期のブランシヨの筆致は、ときに無意味と思われるほどに、断片的かつ一貫性のない引用を散りばめながら、ジャンルを横断して書物をひたすら読んでいることを示す性格が強いものだった。そのため、ときには、オンラインで80年ほど昔の古本を海の向こうから取り寄せて、支離滅裂なメレシユコフスキーのダンテ論を冷ややかに切り捨てたり、モーパッサンの長篇小説をさりげなく全否定したりするブランシヨと一緒にそれらのテキストを読むことになった。結果として、特定の文学思想がすでに見られ、あるいは政治的な思想がなおも抽出できる、といったことよりも、律儀にテキストにもとづいて書評を書きつけていた彼の姿がいちばん印象に残った。もちろん、ピンポイントでなにか言うことはできるだろうが、ヴィシー政権下の1942年のブランシヨは、ありていにいえば、黙々と時評を書いていたのではないだろうか、と思う。そして、郷原佳以氏が『文学時評』の訳者あとがきで述べるように、「占領下のフランスの時代の痕跡」はほとんど認められない、という点には、おおむねうなづく次第である。

そうしたなかで、気になるのは、なるほど、第二次世界大戦の痕跡こそ如実には見当たらないが、第一次世界大戦の痕跡は、すくなく現れていることである。それは、たとえば、激しく従軍したモンテルランによる倫理に言及する際にもちらついているが、自分が訳出を担当したなかでは、「英雄についての考察」(1942年9月9日掲載)が、異色とまでは思わないが、ロマン主義本やコレットの小説を分析するのとおなじく淡々としたテンションで、しかし仔細に、第一次世界大戦に従軍して死んだ人たちの証言や様子を読解している点で、着目に値すると感じた。このテキストで扱われるブノワ＝メシヤンの本は、戦争の極限状態で死を志願した兵士たちの証言を集めたものであり、並列して紹介されるダニエル＝ロプスのプシカリ論は、戦争に熱狂しながら1914年8月22日に死んでいったプシカリが戦死を信仰していたことを指摘するものだった。これら二冊から読み解かれる戦死者たちの精神状態を、ブランシヨは、同じテキスト内で、デュメジルによる『ホラティウスとクリアティウス兄弟』における戦争と英雄の解釈をとおして、「自分の死」という勝利を希求する英雄像として提示するに至る。もちろん、細かく見てゆけば、戦中である「いま」は戦前よりも詩が求められてい

ることがさりと書かれていたり（「ベルクソンと象徴主義」）、批評が影響関係を探る傾向が「両大戦間の20年で目立つようになった」と言ったりする際に（「ロマン主義の知られざる者たち」）、第二次世界大戦が想定されていることはわかるのだが、それに比べると、第一次世界大戦の痕跡は、局所的であるとはいえ、克明に現れている。そのことを踏まえると、第一次世界大戦の「戦後」を、ブランシヨ自身が子供時代、青年期として過ごしたことが思われ、彼の虚構作品『謎の男トマ』や『アミナダブ』、『至高者』に現れる負傷者たちの収容所と思しき描写や、集団生活の記述、激しい轟音、都市、建築の崩壊のイメージに反映されているのは、必ずしも1930年代、1940年代以降の彼の「戦争」の体験には限定されないのではないか、という思いが去来するのである。そして、第二次世界大戦中に、第一次世界大戦をフランスのひとびとがどのように思い出し、捉えていたのかを、ブランシヨと共に考える余地があるのではないかと、思っている。

執筆者について――

高山花子（たかやまはなこ） 1987年生まれ。現在、東京大学東アジア藝文書院特任助教。専攻＝表象文化論、思想史。小社刊行の著書には、『[モーリス・ブランシヨ レシの思想](#)』（2021年）、主な訳書には、モーリス・ブランシヨ『文学時評 1941-1944』（共訳、2021年）などがある。

モーリス・ブランショの本

文学時評 1941-1944 モーリス・ブランショ 郷原佳以／門間広明／石川学／伊藤亮太／高山花子訳
8000 円

*

モーリス・ブランショ——不可視のパートナー クリストフ・ビダン 上田和彦／岩野卓司／郷原佳
以／西山達也／安原伸一朗訳 8000 円

モーリス・ブランショ——政治的パッション ジャン＝リュック・ナンシー 安原伸一朗訳 2000 円

モーリス・ブランショ レシの思想 高山花子 3200 円

[価格は税別]

【連載】

やつぱりこれをやつてよかつた

—Books in Progress 13

小泉直哉

作家本人の手になる話ではむろんないが、その死に思いを馳せるとき決まって連想しそれを前にしては寒々しいような思考停止に陥らずにはいられないある挿話、ある光景がある。1970年11月25日、世界解釈の小説たる大長篇を攔筆した作家は私設軍隊の若年兵たちを率い陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地へ向かった。当地での椿事については今さら言を尽くすまでもなかろうが、死地に赴く途上の男から檄文を託された報道記者は、のちに三島事件と呼ばれることになる狂騒が終幕を迎えた直後に目撃した情景をこう記した。割腹と斬首による自死の現場を望見したその帰路のこと。

頭を垂れてとぼとぼ正門への坂にかかった私は、信じられないものを見た。……下り坂の少し手前、道の右側の元戦史室があったあたりで、数人の職員がバレーボールをしているのを見たのだった。まだ昼休みの時間らしい。女性が四、五人、男も一人か二人いた。それは平和な平和な日本の、これ以上平和であり得ない、素晴らしい景色だった。吐き気がした。

作家本人の手になる話ではない、先ほどそう書いた。だがそれは本当だろうか？ 彼はかつて自分がそこで死ぬはずだった太平洋戦争を戦地に赴かずして生き延び、戦時とも戦前ともまるで相違ない平凡な日常が広がり、続き、自身もまたその中に生きていた。何ごともしなかったかのように。彼などいてもいなくても同じであったかのように。その生死との関わりなどなく世界は存在していたわけで、25年後の死によってこの事態はいっそう明白となったようだ。とどのつまりは、死と、その後に来たあの光景、そして今も存在し続けるこの世界さえもが彼の作品だったのではないか。さらに言えば逆説的な存在証明のごときものだったのではないか。

いずれにしても徳岡孝夫のこの記述は現代を生きる我々のものでもある。現代日本。そこではなぜか、まったく奇ッ怪なことに、西暦2021年になってもTOKYO 2020を標榜する大運動会が繰り広げられていた。一時は実施の賛否をめぐり侃侃諤諤、国をあげて右往左往の大騒動を惹起した催し物であったが、その閉幕から二月半を経た今となっては誰ひとり話題に上せない。一月後とてそうだったかもしれない。そう、あの昼下がり、血と肉の墓場と化した一室の目と鼻の先、澄みきった小春日和の空に白球が輝き若い男女の笑顔が閃き歓声が上がっていた、これ以上ないほどに平和な光景を私は思わずにいられないのだ。よしんばこれが五輪大会ではなく、疫病であったり巨大地震であったり原子力災害であったり無差別殺戮であるなどしても結局は同じことで、今日も明日も明後日も、満月のごとき円球は平和に白く閃く。そういうものだ。

そういうものだからこそ、我々はこの「以後」という視座から三島由紀夫というかつてあった存在を、文学をとらえなおし、そしてつねにとらえなおし続けていく必要があるのではないか。没後半世紀を閲して、翌11月の上梓となる『三島由紀夫小百科』が従来之三島由紀夫論や三島由紀夫研究や三島由紀夫事典の名を冠する書物とは方向性を違え、つとに累々たる作家・作品研究を整理することは当然としても、その先に広がる展望を積極的に提示し未来の研究への途を探る構成としたのはかかる意図があつてのことに他ならない。そこでは秘蔵資料をふくむ豊富な写真や図版とともに作家の生涯が

鳥瞰され（第Ⅰ部 略伝）、主要作品の概要と発表時の反響、今日そして今後来るべき研究が整理され（第Ⅱ部 主要作品事典）、国内外における受容の状況と作家・作品研究の主要著作が解説され（第Ⅲ部 研究史・受容史）、そして新時代の三島研究に拓かれた豊饒な可能性が論点ごとに展望される（第Ⅳ部 三島論の新潮流）はずだが、これらは次の半世紀へと今あらためて託される襁であることは言を俟たない。彼の人生と文学と思想が後世に突きつけた問題系は神話、宗教、古典、美、聖、俗、老い、生死、殺戮、自死、日常性、娯楽作品、男性女性、性多様性、あるいは歴史、国家、政治、経済、革命、戦争、さらには原子力利用や環境問題など種々の領域に達しており、本書ではその各々における三島の見解なり立場なりが再び定位されることだろう。三島が踏んだ道程をたどりなおし、「以後」のこの時代にさらなる未来を見晴るかすこと。それこそが三島以後を生きる我々に突きつけられた課題なのではないだろうか。

かつて彼は言った。瞬く間に過去へと忘却へと追いやられてしまった五輪大会のあと、我々の追考は本書の劈頭に掲げられたこの一節から開始されることになるだろう。

オリンピック反対論者の主張にも理はあるが、今日の快晴の開会式を見て、私の感じた率直なところは、「やつぱりこれをやっつてよかつた。これをやらなかつたら日本人は病気になる」といふことだつた。

これをやらなかつたら日本人は病気になる。しかし今、あれから昭和平成令和と経てきた今、真の意味において病気でない日本人が存在するのだろうか？ TOKYO 2020 をやっても現代日本を覆う病理が癒える気配など寸毫もうかがわれなかつたし、あまつさえ溜まりに溜まった膿が醜く容赦なく漏れ出してきたのではなかつたか。ややもすれば我々の世界は三島が見ていたそれよりもはるかに救いがたい代物へと墮してしまつたのかもしれない。しかし、あるいはそれも、みんなすぐに忘れてしまふのかもしれない。そういうものだ。

執筆者について――

小泉直哉（こいずみなおや） 1987年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

妖怪から民主主義へ

——裸足で散歩 15

西澤栄美子

「先生、妖怪の話は何時から始まるんですか？」

室井康成⁽¹⁾が大学での「民俗学」の最初の講義終了後、決まって学生から尋ねられたのが、この問いだったそうです。

この夏、友人主催の「柳田国男⁽²⁾と民主主義」についての勉強会で、室井の講義に出席するまで、筆者もこの両者の結びつきを理解できませんでした。柳田は1875年（明治8年）に生まれ、日清・日露戦争、大正デモクラシー、15年戦争から日本の敗戦、昭和の高度成長期に至るまでの、当時としては長い生涯をおくりました。

筆者の出身大学には、柳田の直弟子の教授が指導する「民俗学」専攻コースがあり、研究室「柳田文庫」⁽³⁾があり、そこには茶道の宗主の様な風貌の着物姿の柳田翁や、その写真の80年近く前の、松岡一家⁽⁴⁾の写真パネルが飾られていました。

室井によれば、もともと「神隠しに遭いがちな」病弱な美少年だった柳田は、ロマン主義的な文学を志向していた旧制第一中学校（後の一高）を経て、東京帝国大学に進学すると、幼少時に目の当たりにした農村の困窮を改善するという志から、農政学を学ぶようになります。官僚となった柳田は、日本各地を旅し、後に国際連盟委任統治委員としてジュネーヴに赴く中で、「民俗学」という「新しい学問」を構想しました。「民俗学」は、1928年に、日本初の「普通選挙」によって、成人男子すべてに選挙権が与えられるにあたり、彼の考える日本人像、——敗戦後の柳田の言葉によれば、「渡り鳥的な」付和雷同と、「事大主義」から脱しうる——「民俗」に拘泥しない、「個人」が尊重される選挙民を養成しようという試みから生まれました⁽⁵⁾。「民俗学」によるフィールドワークによって蓄積される伝承、習慣、慣習を研究者が分析し考察することによって、それらから自己を一端切り離し、克服し、自律的な政治判断が可能となった「個」が、柳田の述べる「公民」です。すなわち、選挙のための「政治教育」そのものが、柳田の「民俗学」であった、というのが、室井の結論です。

また、子供たちを将来の「公民」たらしめるための基礎教育として、柳田はまず、国語教育を重視します。国語教育によって、子供たちに「相手の話を聞く力」と、「相手に対して自分の考えを話す力」の双方を養うべきとしています。現在、受験競争の勝利者とおぼしき一部の文部官僚や、他者の言葉を傾聴し、自らの言葉で自らの考えを語る力を失いつつある一部の政治家による国語教育の改革（？）は、「（政治に無関心な層は）投票日当日は寝ていてくれればよい」というベテラン政治家の本音通りの有権者を生み出すための方策なのでしょうか？

『遠野物語』⁽⁶⁾に登場するような、オシラサマ、河童、座敷童のような、人々に害をなすというよりは、むしろ身近で不思議な霊力を持った神や妖怪より、ずっと恐ろしいのは、「公民」の養成という柳田の悲願とは逆を行く、現在のこの国の政治・教育という妖怪なのかもしれません。今回のタイトルに、さらに、「そして民主主義から妖怪へ」と、付け加えるべきでしょうか？

【注】

- (1) 室井康成 (1976-)。著書に『柳田国男の民俗学構想』(森話社, 2010年), 『事大主義——日本・朝鮮・沖縄の「自虐と侮蔑」』(中央公論新社, 2019年) などがある。
- (2) 柳田国男 (國男) (1875-1962)。
- (3) 「柳田文庫 民俗学研究室」。1951年, 柳田は蔵書を成城大学に委託し, 大学に「柳田文庫」が設立された。柳田の没後, 委託されていた蔵書が寄贈され, 1973年に「成城大学民俗学研究所」が発足する。
- (4) 国男は松岡家から, 1901年, 柳田家の養嗣子となる。
- (5) 柳田国男『青年と学問』1928年。
- (6) 柳田国男『遠野物語』1910年。

執筆者について——

西澤栄美子 (にしざわえみこ) 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻=美学, フランス文学。小社刊行の主な著書には, 『書物の迷宮』(1996年), 『宮川淳とともに』(共著, 2021年), 主な訳書には, クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』(共訳, 1987年), 同『映画における意味作用に関する試論』(共訳, 2005年) などがある。